



## 気づかせ屋

恒例行事だった「卒業ライブ」がもう3年もできていません。その年に卒業する中3や高3の送り出しだけでなく、すでに卒業した元塾生たちの同窓会的なイベントでもあったのでその意味でも残念です。そんなこともあってかこの春は卒業生たちが次々と訪れてくれています。高3の女子4人組はそれぞれの進学先が決まったと報告に来てくれました。大学4年の男子2人は就職決定の報告で、1人は設計の仕事に就くそうです。「今日、国家試験の発表があって無事合格したよ！」と理学療法士としての一步を踏み出す人もいます。翌日にはやはり「今日、看護師の国家試験に合格しました。」という女子と「中学の家庭科の先生として配属が決まったけど、ちょっと遠すぎて…」とぼやく女子が来て、しばし塾仲間の近況も教えてくれました。みんなが卒業してからあっという間に7年ですが、こうやって訪ねてきてくれて「アポなしで来たけど塾長が変わらずいてくれて良かった！」と言われ、まだまだ頑張ろうと思いました。

ところでプロ野球の名監督としてみなさんご存知の野村克也さんがこんな言葉を残しています。「この仕事は『気づかせ屋』だと感じる事がよくある。選手の資質や能力は本人には見えにくい。だから本人以上に辛抱強く構え、潜んだままの可能性に目を開かせてやる事が監督の仕事なのだ。」同じことは塾で教える場合にもいえることです。ただ教えるだけでなく、気づかせてあげることが本来の仕事ではないでしょうか。例えば小学生が算数の文章題がわからないと投げだしそうになった時、式と答をただ説明するのではなく一緒に問題文を音読してあげると「ああわかった。」と自力で式を立てられたりします。同様のことは高3が数Ⅲのやや難問を質問してきた時に「この式を導くためにはどこに戻ればいいたろう」と一緒に考えていると本人が「ひらめいた！」となることもありました。

こうやって訪ねてきてくれる卒業生たちが、これからもいろいろなことに気づかせてくれる人に出会いながら自分の道を切り開いていくことを願わずにはられません。